



筑紫女学園大学リポジト

研究所回顧 ～研究所の二十年～

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-05-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/317

研究所回顧 ～研究所の二十年～

出席者

名本幹雄（元研究所長、元学長、名誉教授）
松崎治之（元研究主任、元副学長、名誉教授）
橘英哲（元研究所長、名誉教授）
高石史人（前研究所長、元学長、人間福祉学科教授）
小山一行（前学長、アジア文化学科教授）
間瀬玲子（前研究主任、英語メディア学科教授）

聞き手・司会

大津忠彦（研究所長、アジア文化学科教授）
宇野智行（研究主任、日本語・日本文学科准教授）

研究所創立の経緯

大津：本日はお忙しいところご参集頂きありがとうございます。特に名本先生、松崎先生、橘先生には、今日のためだけにご足労いただきまして厚く御礼申し上げます。

今日の座談会の主旨は、開設 20 周年を迎えた人間文化研究所（厳密には昨年度末に迎えております）ですが、将来的に、大学内の組織として、どういう形で存在すべきかを考えなければならない段階にきております。そこで、これまでの歩みを遡り、創設当初の目的を確認した上で、再度、研究所の将来を検討していこうと、これまで関わってこられた先生方に本日お集りをいただいた次第です。

先生方がこれまで、研究所に関わってこられた頃のご苦勞やエピソードなど、忌憚なくお話し頂きたいと思えます。研究所長をしております私は、まだこちらの大学に来て日も浅く、研究所の昔を存じておりませんので、本日の司会進行につきましては、研究主任の宇野先生にお願いしたいと思えます。よろしくお願い致します。

宇野：まずは準備しました年表を見ながら、時系列でお話しいただければと思えます。筑紫女学園大学が開学したのは、昭和 63 年（1988 年）です。ここにいらっしゃる先生方は、大学開設の頃をご存じかと思えます。大学開設から研究所が発足らしき態勢を迎えるまでに 2 年間のあいだがあります。この研究所スタートまでの事情から、先生方のご記憶をたどっていただきたいと思えます。もう 20 年も前のことですが、どのような経緯で研究所が作られたのでしょうか。まず大学設置の段階から橘先生が関わっていらっしゃると思うのですが、大学開学と研究所創設はどのように関わっているのか、またどのような背景で研究所が出来たのかなどをお聞きしたいと思います。



橘：大学を設立するには、その主旨を書かなければいけないのですが、その頃、「国際化」というものを前面に出さないと、認可がおりない状況にあったように記憶しています。特に日本語・日本文学科というのは、近辺にある同じような学科ではダメだったのです。英語学科は国際化の花形みたいなものなのでいいとしても、日本語・日本文学科は特になぜ国際化なのかと言われたようでした。そこで考えたのが「世界の中の日本語」みたいなコンセプトでした。あの頃どこの大学も似たような問題を抱えていて、いわゆる「国際文化研究所」のような研究所を持っていたようです。文科省（当時の文部省）からの指導もあり、大学開設当初から研究所創設を視野に入れていたような気が致します。

宇野：英語学科と日本語・日本文学科という2学科でスタートして、両方の教員がかかわれるという形と、既に短大があって、「国際」という名前がついたのは、大学開設と密接な関係があるということですね。

高石：それは文科省の方からの指導だったのでしょうか。それとも、こちら側の問題意識だったのでしょうか？

橘：もちろん指導もありましたが、われわれの方にも、そういう気持ちがあったのは事実です。

高石：認可申請のための主題として「国際化」を前面に出されたようですが、命名自体も、すんなり決まったのでしょうか？

橘：「国際文化研究所」という名前は、かなり早い時期からその名前を意識しており、最初から取り入れていたと記憶しています。ただ初年度からの発足は難しく、実際の活動は、2～3年後になったようです。完成年度までに、きちんと発足させればいだろうと考えておりました。

高石：それは、研究所というのは、あくまでも大学の附属機関ですから、まずはその母体である大学の立ち上げに、力を注いでおられたということでしょうね。

大津：名本先生、いかがでしょうか？

名本：私は申請が許可されてから、この大学に来ておりますので、それまでの経緯は、よくわかりません。ただ資料によると、グローバル化、国際化という大学のコンセプトと関わって、研究所発足に至ったような気がいたします。

研究所創立の目的

高石：当時の自己点検評価表を見ると、大学の立ち上げと同時に、「大学教員と短大教員の合同研究の場として研究所を位置づける」と書かれています。具体的にはどうだったのでしょうか？

松崎：それはありますよね。私が覚えているのは、大学の横田先生が、これからは、いわゆる大学と短大の共同研究が大事ではないか、と言われていたように思います。

宇野：大学が出来て、一緒に研究する場を確保しようという狙いがあったということですね。

松崎：そうだと思います。そういう狙いは確かにあったように思います。私は横田先生からこのことをよく聞いておりました。ただ出発点として、私たち短大教員がどのくらい自覚的に参加していたかはわかりませんが、狙いはそこにあったと思います。

高石：横田先生は、随分と長い間、研究主任をされておられますが、横田先生から松崎先生へと研究主任がバトンタッチされた時、ご自身の中では、研究所は「大学と短大の共同研究の場」という意識も働いて、短大所属の松崎先生に研究主任を引き継いで、という思いもあったでしょうね。

松崎：そうですね。横田先生とは、そのようなことをお話しておりました。わたしもその通りだと思います。

大学と短大両輪で活動していかなければ…という主旨を聞いた覚えがあります。

小山：そういう話は、私も聞いたことがあります。大学と短大と2つあるけれど、研究所は双方にまたがるものなのだとおっしゃっていました。研究談話会も大学・短大合同で聞いていくということでした。



研究所の正式発足

高石：1990年（平成2年）の最初の自己点検評価表の冒頭に「過去3年間を総括して、短大と大学の教員にとって自由に行き来できる大学機関はこの研究所だけであり、その意味では研究所は短大と大学の合同研究活動にとって欠かせない機関である」と、こういう書き方がされていますよね。だから大学立ち上げの主題に掲げた「国際文化」と、大学と短大合同でその主題に関わる研究を行うのはこの機関だよ、という存在意義ですよ。そうした意図にも関わって、研究所の正式発足の前に、まず立ち上げ準備のための研究所協議会ができたと考えられます。恐らくこの協議会が最初の研究所の運営やメンバー等を決めていったのではないのでしょうか？ 先生方、ご記憶にありませんでしょうか？

宇野：自己点検評価表によれば、1990年の4月に研究所設立準備のための研究所協議委員会が発足しています。「研究所設立準備のため」とありますが、正式にいつ研究所が発足したのかというのが、記録ではよくわかりません。ご記憶のあられる先生方いらっしゃいますでしょうか？

橘：私はその委員会の委員になった覚えはないです。

名本：私もない。

高石：小山先生は早い時期のシンポジウムに関わっておられるから、そのあたりご記憶な

いですか？

小山：ありません。

宇野：誰がこの委員会のイニシアティブをとっていたのでしょうか？

間瀬：記憶がないですし、聞いたこともなくて、今日初めてです。

宇野：研究所協議委員会という組織名は、10年以上続いているはずですが。私が記憶している範囲、つまり2000年（平成12年）度以降に限られますが、研究所協議委員会は、現在の人間文化研究所になるまで、各学科から委員が選出されて、年に2～3回委員会が開催されておりました。

高石：発足当初の協議委員というのは、学科から一人ずつ出すという形ではなくて、大短から学部を代表するような形での人選だったのではないのでしょうか。1990年4月の研究所設立準備のための研究所協議委員会の発足時のメンバーは誰だったのか。恐らくそこが『論叢』の主題、「表現と言語」というようなタイトル等も決めたと思われます。1993年3月、「協議委員会は93年度のシンポジウムを計画」と資料にあります。たぶん、企画も同様に協議委員会の決定なのでしょう。初期の頃の『論叢』には主題、つまりメインタイトルがついています。これも協議委員会の判断なのではないのでしょうか。

宇野：当時の協議委員会のイニシアティブをとっていたのは、横田先生であろうということは想像がつくのですが、あくまでも想像でしかありません。しかも、正式発足がよくわかりません。92年度自己点検評価表最終ページに、「計画を確実に実行して、研究所を正式に発足させ、さらに研究環境を向上させるためにも、今後の学園の援助の増加が強く望まれる」という横田先生の文章が残っています。けれども、これは92年度に書かれたものです。この時点で「正式に発足させ」と書いているのは、正式に発足していなかったのかと思われるような表現となっています。

高石：『論叢』創刊号は1990年（平成2年）ですから、『論叢』は先行して発行しながら研究所の正式発足ということが考えられます。この時点で国際文化研究所の機関誌『論叢』という位置づけでは、創刊されています。

宇野：その通りです。創刊号から『国際文化研究所 論叢』のタイトルを使っています。

高石：つまり「正式に発足させるために、学園の援助の増加が強く望まれる」という文の少し前に「研究費が必要である」とあることから、もう少し研究所らしく研究費を出して欲しいということですね。そう考えると、初めて研究助成費が出る時点が、正式発足ということになるようですね。おそらくこのころ正式に発足させなければいけないという問題意識が生まれていたのではないのでしょうか？

小山：そうですね。研究所としての部屋もありませんし、予算も当時はありませんでした。とにかく論文を書いて、『論叢』を出していこう。そういうことから始まったという記憶があります。

宇野：私が就任した時は、すでに研究棟の1階にアジア文化学科研究室と並んで、研究所の部屋がありました。そこには川崎さんという事務担当の方がいらっしゃいました。それ以前は、どこにあったのでしょうか？

高石：今の実習指導室のあたりにありました。松崎研究主任の頃でしたよね。

松崎：そうでしたかね、覚えていません。

高石：7号館の現在の教員談話室の向かい側です。

宇野：その前はなにもなかったのでしょうか？

小山：ないです。

高石：あの場所を作ったのはいつでしょうか？

小山：あそこに横田さんが研究所としての部屋をつくり、やっと部屋ができた、という感じだったと思います。それまではないですね。この資料によると、研究所事務職員の永井さんは10月からの採用と書いてあります。永井さんを入れた時に、研究所の部屋も出来たのではないのでしょうか。そうでないと居る所がないですから。平成5年（1993年）10月・・・それまでは何もなかったことになります。

高石：松崎先生が研究主任の時には、研究所の部屋はあったですよ。松崎研究主任のときに僕は赴任し、そこで会議があったことを覚えておりますから。

松崎：ぼくは、よく覚えてないですね。その頃、横田先生が研究所としての部屋をもっておられたかどうか。

高石：さきほど宇野先生が言われた平成4年度（1992年度）の自己点検評価表は総括ですから、「研究所を正式に発足させることが望まれる」とあって平成4年度が終わる。そして平成5年度10月から研究所事務職員を置くようになった。これに連動して場所を設定したと考えると、すべてがすっきりしてきます。平成5年度（三隅学長の時）の10月から研究所の場所において、そこに事務職員を配置しなければならないということになり、それをもって正式発足ということも言えなくはありません。

宇野：場所と事務職員の確保、ということで、研究所がひとまずの体制を整えた。それをもって横田先生は正式な発足とお考えであったのかもしれませんが。要するに、場所もない、事務のヘルプもない中で続けてこられて、平成5年（1993年）に場所と人を確保した、ということでしょう。

橘：少なくとも文科省（前の文部省）に届けた形での研究所は初年度からある訳ですから。何とか形をつくっておかなければいけないということで、とりあえず『論叢』から始めようということだったと考えられます。シンポジウムなどのいわゆる本来的な活動というのは、まだ先の話として…。

高石：そうですね。これはもう少し後の話題でしょうが、研究所において、研究を行うための研究助成金というものが発足しています。この研究助成金は、1997年の間瀬先生への助成がスタートです。1997年というと平成9年度です。その頃の研究所の場所、永井さんはどこに常駐していたのかという話になります。

間瀬：それは覚えています。この頃のことはよく覚えておりまして、さっきは言い淀んでしまいましたが、永井さんが来られた秋以降に、横田先生の呼びかけで、当時の若手で歓迎宴会をやったことがあります。その数年後だと思いますが、研究所がどこにあったかという、研究棟1階の、現在個人研究室2つになっている場所だったんです。そこに数年いて、それから個人研究室が足りなくなったということで、研究所が引っ越したのを、はっきり覚えています。今の場所に引っ越ししたのが平成17年の夏でした。

小山：ですから、研究棟に行く前は今の福祉実習室あたりであって、研究棟の1階に行って、またこちら（7号館）の現在の位置に来たんです。

間瀬：はい。いまの研究棟1階2部屋のところがぶち抜きで、かなり広がったです。そこにおられたのは永井さんですね。あとは変遷がありますけれども。

高石：研究棟に行く前は、ずっと福祉実習室のあたりだったのですね。

間瀬：研究棟に行って、個人研究室を作るということで、またこっちに引っ越したということになります。私は引っ越しに縁があるという気がします。

高石：そうすると、三隅学長に代わられて、さきほどの横田先生の自己点検の総括直後、1993年10月に研究所が空間的に確保されて、それをサポートする体制が整備された。これをもって正式発足は1993年、と考えるのが一番妥当な気がしますね。

間瀬：ええ、そうですね。

高石：1992年（平成4年）の自己点検評価表の次が、1995年（平成7年）の自己点検評価表になるわけですが、そこに「正式に発足しました」とは書かれていない。ここにそういう一文があったっておかしくないという感じがしてきましたね。

宇野：多分1990年度に研究所協議委員会が発足して、同じ年度の3月に『論叢』創刊号を出しているということですので、活動を始めたという名目上は1990年度に研究所が発足したことになるのでしょうか。そして先ほど高石先生がおっしゃったように、1993年度（平成5年度）に実質が伴ったという形で考えればいいと思います。でなければ、もし正式発足が1993年度（平成5年度）だったら、今回20周年にはなりませんから。（笑）

高石：だから、ちょうど1993年度で、大学の立ち上げを主導された雲藤学長から、二代目の三隅学長に展開していくということになるわけです。そうすれば、大学がひとまず完成を迎えて、研究所によりやく少し挺入れできる体制になったということでしょうね。

学内シンポジウム

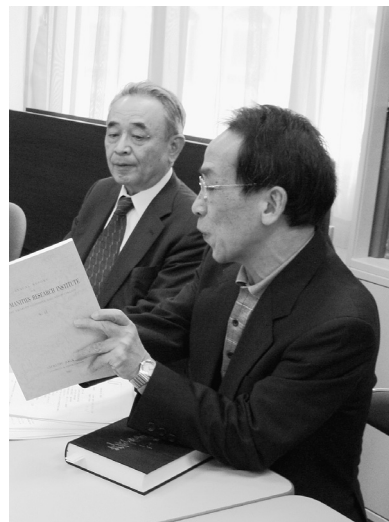
高石：それまでは、場所もない中で、手弁当でシンポジウムなんかも開催されていたようですね。その第一回のシンポジウム（1991年11月）に、小山先生が出られています。これが第1回目の国際文化研究所のシンポジウムですよね、「生活の中の仏教を考える」という。名本先生も名を連らねておられますよ。

名本：あと恵利先生とかですかね。そういえば、何かやりましたね。

宇野：この第一回のシンポジウムも、やはりこの協議委員会が企画したとは思いますが。名本先生と小山先生がいらっしゃるので、どういう状況であったのか。最初のテーマ「浄土真宗とはなにかー生活の中の仏教を考える」が、どういう流れで決まっていたのか。また、研究所の大きな事業であった公開シンポジウムが、どのような形でスタートしたのか、そのあたりをお尋ねしたいのですが？

小山：私も明確な記憶はありません。

高石：1回目、2回目ともに「浄土真宗とはなにか」が主題となっています。また、2回目は「シンポジウムのための学内研究会」まで準備されています。研究所にとっては、まずこれが最初の主題となっていたのでしょ



う。何か憶えておられるようなことは・・・？

小山：どういう経緯でという記憶はありませんが、私は横田先生から、本学の研究所というのは、建学の精神に基づく大学の研究所なのだから、テーマは、まず仏教を柱にやりたいという話を聞いたと記憶しております。

名本：私もそのようなことを聞いた気がします。それで僕も横田先生から言われて・・・話した記憶がありますが、なぜお坊さんでもない私が選ばれたか、当時わかりませんでした。梶村昇さんの『南無阿弥陀仏の論理』ですかね、その本も今日持ってきておるんですよ。ここの中で真宗と言うのは二種深信というんですかね、機の深信と法の深信、それから念仏を称えること、それから自然法爾、そういう教えが真宗なんだということを書いとするように私が勝手に解釈して、それを話した気がするんですよ。だからなんでこういうテーマを選んだかと言うのはよく覚えません。横田先生からね、なにかそういうことで話をしなさいと言われてやったような気がするんですね。

宇野：それと自己点検評価表を見ていると、参加者が教職員・学生と、みごとに学内で完結しているような感じがします。特に教職員の参加が非常に多いのが、驚いたところです。やはりこれは、当時の先生方自身が研究所活動に参加するぞという意識が高かったことが窺えます。そのあたりのシンポジウムに対する教員側の意識はどうだったのでしょうか？

高石：これは瑣末的なことですが、シンポジウムが行われた場所はどこですか。スクウェアアティーホールというのはすでにあつたのでしょうか。

小山：いや、なかったと思います。スクウェアアティーホールでやった記憶はありません。私がした時は、総合会議室だったと思います。

名本：ああ、総合会議室でしたね。

小山：山折先生（山折哲雄氏）の第2回シンポジウム（1992年6月）も総合会議室です。

高石：その時には学生65名が参加しているんですね。

小山：たしか外部から著名な先生が来られるということで、米村先生（故米村竜治氏、当時日本語・日本文学科教授）が日本語・日本文学科の学生に聞きなさいと相当おっしゃったのでしょね。米村先生と横田先生のあうんの呼吸と言うか、連携プレーでやったんだろうと思うんですよ。そこで、横田先生は比較思想的な視点で浄土真宗を、という立場。山折先生は、教団の本願寺の親鸞じゃだめだという立場。そう言うお考えが非常に強くて、そこがタイアップして、こういうメンバーを呼んでの話だった、という雰囲気は覚えています。

宇野：このシンポジウムの事業は、学内でみんなで研究しようというような意図ですね。

名本：そんな雰囲気ですね。

小山：学内が小さかったからですね、大学は2学科しかなくて。だから今みたいに6学科あって、研究所が勝手に何かやっているぞという感じじゃないですよ。学内で、外部から発表者がおみえになって研究会をやるといったら当然みんな出る、という感じですよ。

宇野：なるほど。所帯が小さかったということ。

小山：そうそう。だって参加教員26名ということは、先生方相当出席しているということですよ。だって大学発足時は全部で35、6人でしょう。

宇野：結構出席していますねえ。

高石：短大からもということでしょうね。先生、このあたりのご記憶は？

松崎：いや、僕は聞くだけで。

高石：参加はされてたんですね。

小山：みんな出ましようよ、という感じだったですよええ。

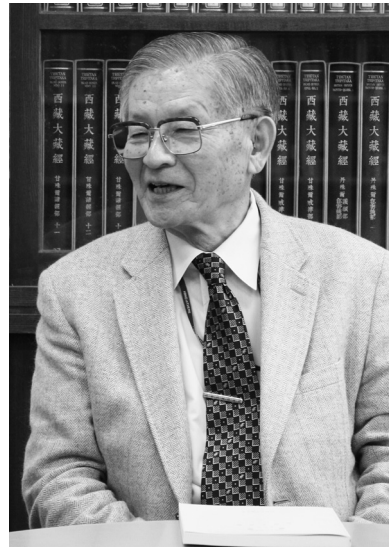
松崎：そういう雰囲気はありましたね、確かに。

小山：大学ができたばかりで、そういうイベント的なものにはみんな張り切って出席していた、という感じがしますね。

高石：その第3回から、今度は韓国・中国・日本と、ちょっと国際的になります。

宇野：「大学生の外国語教育の現状と問題点」という題で、第3回シンポジウムをやってますね。

名本：これですね、私が司会者でやったわけですが、大学英語教育学会九州・沖縄支部で TOEFL の成績が中国1番、韓国2番、日本3番と、中国と日本を比較してみると、点数において60点位の差がある。韓国においても40点位の差がある。日本の大学生はどうしてこんなに英語力が弱いのか、ということで、我々としては、国際比較をやってみようではないか、ということから、1991年に支部の中にプロジェクト委員会を6人で作って、その研究をやるということ。まずは福岡県の大学の英語の学習実態調査をやって、『論叢』第3号に載せてもらいました。これを先行研究として、中国・韓国・日本の各大学にわれわれのプロジェクト委員が向いて行ってね。『このままでよいか大学の英語教育—中・韓・日3か国の大学生の英語学力と英語学習実態—』



という書物を1997年に出版しました。大学教育学会学術賞をいただきました。そのために、1993年1月23日に、私の司会でこういうテーマでシンポジウムを行ったんです。結局、結論めいたものとしては、日中韓の大学英語教育にはずれがあるという風になったんですね。だから、学生の要望にそった教育を日本はしていない、という結論がでたんです。ともかく、日本の大学英語教育の欠陥はどこにあるのかということを探り出すために研究を始めて、書籍としてアウトプットするということを一応行っていたわけです。

宇野：1991年にさかのぼって、大学英語教育学会の九州・沖縄支部でそういう話があって、先生がイニシアティブをとって研究所でそのテーマの元にみんなで研究しよう、という形だったのですね。

名本：うちの学内ではそうですね。全体では九大の宮原文夫先生が委員長になりました。そして私が副委員長格でした。

高石：これは先生、国際文化研究所のシンポジウムとしてこういうことをやろうというのは、先生がお手をお挙げになったのか。それとも横田先生の方から、今まで「浄土真宗とは何か」と、この学校の建学の精神に関わることをまずシンポジウムとしてとりあげて、第3回目に、国際文化研究所でもあるし、先生がそういうことをやっておられるということを知られて、先生にこんな企画でやって欲しいというような、そんな依頼があったんではないですか？

名本：その辺の記憶はないんですけども。先ほど申しましたように、福岡県内の学力調査をやったわけなんです。おそらくその時に、私がこれはこういう主旨の先行研究だよと、横田さんに吹聴したのかもしれませんが。

宇野：なるほど。これも教職員 15 名ということになっていますけれども、やはり学内の先生方が…。

名本：151 教室だったと思います。

宇野：現在 6101 教室という名前になっているんですけども、昔 151 教室でしたね。この学生出席 18 名というのは、英語学科の学生達が中心になって集まってきたんでしょうね。それでその後 1993 年、1994 年とシンポジウムという形が続いて行きます。

高石：仏教で 2 回やられて、その後外国語教育が来て、1993 年 3 月 11 日に「協議委員会はシンポを次のように計画している」と。ここから「仏教と女性」とか「環境問題」とか、少しテーマが広がってきていますね。横田先生が、ここまではかなり主導されていた感じはありますよね。この辺から少し広がりをもってくるという感じがするんですけど、このあたりを企画した協議委員のご記憶は？

宇野：いったい誰なのでしょう？

高石：あと、もう一つは『論叢』が、最初のころ、中身をみると必ずしも主題性を持っていたとは思えませんが、『論叢』には主題が付されていた。第 2 号が「過去から現在へ」、第 3 号が飛んで、第 4 号が「浄土真宗とはなにか」ですよ。この主題が付けられていたのは、何か意図があったのでしょうか？

宇野：そうですね。しばらく『論叢』は主題というものをずっと設定していますね。例えば第 4 号は「浄土真宗とはなにか」で、第 5 号は先ほど名本先生にお話いただいた「中国韓国日本 3 ヶ国における大学外国語教育の現状と問題点」で、第 6 号あたりからそれがなくなるんですかね。

高石：それは、つまりこういうことでしょうか。研究所の『論叢』が、そのうちに第二紀要化してくる。最初の頃は研究所としてのテーマというものがあった。それがだんだん大学の紀要には書けんけれども『論叢』には書こう、と第二紀要化していったのではないかな。草創期を過ぎた研究所の転機があったように思われます。このあたりについて、協議委員会がどういう議論をしていたのか、知りたいなど。

宇野：知りたいですね。テーマを持っているというのは、やはり『論叢』のテーマはこれであるから、こういうものを書こうとかいうように、現実そのテーマに沿っているいはさておき、執筆者も意識はすると思うんですよ。そのテーマを決めているのは、この協議委員会であって、全然好き勝手な研究を載せればいんだよ、というようには意識されてないと思うんですよ。

橘：それはだから、いわゆる普通の紀要とは違うんだという意識はあったんですよ。

高石：橘先生、1993 年 3 月の協議委員会には入っておられないですか？先生が入っておられてもおかしくないと思われますから。

橘：覚えがない。

高石：小山先生もこのころの協議委員会には入っていらっしやらない？

小山：そうですね。とにかく赴任したばかりで、まだペーパーでしたから。

間瀬：テーマ性なんですけど、私の前任者だった松下さんが研究主任であった時代に、こ

のころテーマ性を持たせたいという思いがあって。あるテーマに基づいて研究主任が依頼する、依頼してハイと言ったかどうかは別として、そういうことが数年間は続いていたのは確かです。私も依頼を受けたんですが、そのテーマと私の研究の間にあまりに隔たりがありましたので。ある時期からかもしれません、第二紀要的になってしまったところはあったかもしれませんが、私の前任者のころにはある種テーマをもって、シンポジウムと絡めてやっていた、というような記憶はあります。

宇野：例えば、小山先生が関わっておられると思うのですが、シンポジウムの為の学内研究会というものが 1992 年度の自己点検表に記載されています。この学内研究会で小山先生が「超越について」という発表をされているのですが、それが、多分『論叢』の第 4 号に掲載された「浄土真宗における超越について」という題目の論文の執筆と連動しているのですね。シンポジウムで掲げたテーマと『論叢』のテーマは、きちんと連動させようという形だったんですかね？

間瀬：それはあったと思います。例えばシンポジウムで発表した方に、原稿執筆を依頼して書いていただくとか。

宇野：もちろん『論叢』の形態として、シンポジウムや公開講演会などの記録として『論叢』に載せるという流れはずっとあったんですけども、内部者が参加した発表だとか、内部の人が発表して、内部の人がきちんとアウトプットするという形もあったということですよ。

間瀬：そうですね。

宇野：それは、名本先生が三つの国の大学英語教育についての論文を、シンポジウムでもやって論文も書いて、という形で進んでいるはずですし。シンポジウムのテーマ性を生かして『論叢』に書いていこうとかいうような、アウトプットまで含めたシンポジウムのやり方というのは、実は初期はかなり連動してうまく考えられていたんじゃないかと、そういう印象を僕は受けるんですけども。

間瀬：私は国際文化研究所の最後の研究主任なんですけれども、その最後のシンポジウムをお願いした方は外部者ですが、論文執筆を想定してお願いしていた、ということだけは覚えております。『紀要』と『論叢』との大きな違いは、『紀要』はもう自由に物を書く。『論叢』も自由に論文を書く、それにプラスして、学内または学外でのシンポジウムとの連動を意識した作り方、ここに大きな差があって、これは現在もそうだと思います。

宇野：『論叢』という雑誌が、第二紀要化していくという時期があったとは思いますが、当初は例えば、書評を書いていたりだとか、ただの論文の集まりじゃないぞという、バラエティに富んだ作り方、テーマ設定、シンポジウムとの連動と、すでにあった『短期大学紀要』『大学紀要』とは違うという意識が色濃かったんじゃないかなという風に感じます。

高石：研究所の紀要として特色を持たせようというような意識ですよ。そこに一般の論文を投稿してもいいけれども、何かテーマ性を持たせようとか、シンポジウムも研究所の研究成果として報告していく。おそらく、これはもう少し後の話題なのかもしれませんが、初期のシンポジウムが後の方では公開講演会が主になって、新学科立ち上げの広報を兼ねた生涯学習企画のようになっていきます。初期の頃はむしろ、内部の先生たちが勉強会や共同研究をシンポジウムという形にし、それを研究成果に残していく。そこのところが、外部の著名な講師の公開講演をテープ起こしして、それを登載するという、何か方向の転

換のようなものが感じられる。初期には内部の先生方が中心になられて、シンポジウムなどが企画され、そのために勉強会をやったものを論文にされていくといった、そういう内側からの自覚的な形があったんでしょうね。



研究談話会

高石：また初期の頃、大学は2学科、短大も安定していて、それで研究談話会が4回もやられていた。

宇野：そうですね、年間4回やっていますね。

高石：それはある意味で、学内で先生たちも研究にじっくり取り組めた時代なんでしょうね。しかしながら、やがて学部の改組等で雑用が多くなり、研究談話会に集まる人も減ってくる。

宇野：大学・短大にいらっしゃる先生方が、みんなで集まって研究の話をしよう、という雰囲気は初期の頃はあったんだということですね。それが、だんだん世知辛い環境になっていった…。

小山：いや、そうだと思いますよ。

高石：大学2学科の体制で、平成7年（1995年）の自己点検評価表「国際文化研究所に関する配慮」の項で、「研究談話会は、大学・短期大学の先生方を対象に、毎回お一人に話していただく形式で、年に4回行ないました」と書かれていますが、これが開かれた回数として最多なんですよね。それが徐々に、そのペースではいかなくなる。このあたりまでは、つまり大学が2学科の頃までは、それなりに落ち着いた環境があった。そういう意味では、アジア文化と福祉の立ち上げというのは、研究所にとっても一つのターニングポイントになっている。関係分野の著名人を招いて、学科開設の対外的な宣伝周知を狙った公開講演会をやるとか、それを記録しテープ起こしをして研究所の『論叢』に載せるという感じに展開していったんでしょう。

間瀬：初期の段階の研究談話会のことを思い出したんですが、当時はお茶とかお菓子とか用意されていて、和やかな雰囲気でした。

小山：出席が多かったですよ。

間瀬：多かったですね。10人とかそんなものじゃなかった。何十人も先生が出席されていました。

宇野：そんなに参加者が多かったんですか？

間瀬：たくさん参加されてましたよ。私、速水先生の発表を覚えているんですけども、ずいぶんたくさんの方が出席して、熱心に聞いていて。例えば三隅学長とか参加されていて鋭い質問をしたりして、そういうことを覚えています。だんだん回数が少なくなってきてますけれども、私は九州共立大の野球部の監督の……。

宇野：ああ、仲里先生（仲里清氏）ですね。

間瀬：はい。「もう一度、日本一」という題目でした。普通の教室での開催だったんですけども、ずいぶん沢山の方が聞いていて、当時はみなさん余裕があったんだなと。

宇野：それには私も参加しています。この時は、筑陽学園高校の野球部の生徒さんも来てましたね。仲里先生は九州共立大学の野球部の監督だったんですけども、共立大野球部が大学日本一になった裏話などを聞かせて頂きました。城戸先生が呼ばれたんです。外部の人を呼ぶことも、ありましたね、研究談話会に。

間瀬：ありましたね。

高石：つまり今、特別研究会でやってるような感じで。

宇野：そんな感じです。

高石：それで研究談話会がね、橋先生が第2回目で発表されているんですよ。1994年の研究談話会で、つまり年4回やった年です。そこで、そもそもこの研究談話会というのは、なぜこういう会を設けようということになったのか、その意図についてはいかがですか？

橋：もともとね、短大でやってたんですよ。

宇野：先行形態があったんですか？

橋：はい。ありました。短大でね、高宮学舎からこっちに移って間もなくだったと思うんですが。先生たち中心に研究会みたいなものを始めたんですよ。その時私は、『正法眼蔵随聞記』を読まされたことがあって、よく覚えているんですけども。その次に、学内の先生たちにいろんな発表をしてもらおうじゃないかと始めたんですよ。勝手に「何かを考える会」というのをこしらえたんですよ。それはね、何回だったっけ。月1回位のペースじゃなかったですかね。会議のない木曜日に。これはかなりの先生たちが話されてました。

松崎：してありましたね。

高石：それが先行形態にあるんですね。

橋：その形があったから、先生方の研究を分かりやすく話してもらおうというような風になったんだろうと思うんですよ。

高石：これも大学・短大入り乱れてですものね。

宇野：そういう先行形態があって、大学が出来て、新しい先生方がいらっしゃったから、その先生方の研究の専門分野がいったいどういうものなのかとか、そういうのが狙いだっただけでいいかな。最近の研究談話会ではなかなか考えられない。

間瀬：考えられない。

小山：みんな忙しくなってますよ、もう極端に。

間瀬：本当そう思いますよ。

大津：なんとかならんですかね。

小山：僕も本当、赴任した頃はですね。まあ仕事はあったんでしょうけど、今と分量が全然違いますね。

高石：談話会を開く日がないんですよ。日にちの設定が。非常に難しくなって。

松崎：これはやっぱり、昔はよかったということですね。

高石：これは重要ですよ。学問・研究の自由という非常に大事なところで。

橘：今は先生たちが忙しすぎる。

宇野：最近の談話会でお茶が出る事はないですね。

高石：私も研究所長になって、研究所の予算を組むのに研究談話会には5万円が組まれていました。前からその程度の予算が組まれていました。その時は、なんでこういう予算が必要か、という感じがしましたが、そうかこれはお茶代で、ということだったんですね、きっと。

宇野：多分それはずっと代々、研究談話会事業として請求されてきたと思うんですよ。

間瀬：私が研究主任の時にはお茶なんか出すということにはなかったと思うんですよね。だからもうずいぶん初期の段階だったと思います。

宇野：松崎先生が主任をやられていたころは、研究談話会で先生方が参集されたときに、何か茶菓子を出すだとか、そういうことは？

松崎：いや、そういうことはもうなかったですね。

橘：初期のころは出てたような気がしますけどね、暫くは。短大時代の「何かを考える会」もお茶を出していたんです、お茶とお菓子を。そのころはみんなで持ち寄りですけどね。それが残ったんだろうと思うんですけどね。まあ間もなく無くなったんでしょうね。

小山：僕は国枝先生の「キノコの微生物」の話の時（1995年1月）は、お茶が出ていた気がしますけどね。お茶菓子があったような。

高石：話題提供をされて、手当というのはなかったでしょう。

小山：なかったですね。

橘：そんなのはなかった。

高石：僕の時に付けるようにしたんです。ほんの僅かですけど、謝礼という名目で。

間瀬：そうですね。私が主任の時は手当は出しておりません。全くもう、ボランティアで。

橘：だからお茶菓子は毎回あったかどうかはわかりませんね。適当に持ってきて、じゃあってなもんで、持ちこみでしたからね。いずれにせよ、もっと和やかだし、皆熱心に聞いていましたよ。

学外公開講演会

宇野：さきほど高石先生がおっしゃったように、学内の人間が核となって複数の人間でシンポジウムをやるという形式が、一人著名な人を外から呼んできて、天神ビル辺りで講演会をやるという形になったのは、だいたい1997年、1998年あたりです。

高石：松崎先生、それは多分、福祉とアジア文化の立ち上げが絡みますよね。

松崎：そうです。第 14 回の羽田さんの時（1998 年 11 月：羽田澄子氏「長寿社会を生きる一映画を作りながら」）がそうですね。

高石：著名な映画監督の羽田さんを連れて来て、大学が 2 学科から 4 学科になるところで、その宣伝を兼ねてアクロス辺りでやりましたね。

宇野：ちょうどその時、松崎先生が研究主任をしておられたと思いますが・・・それまでは学内が多かったんですね。

松崎：そうですね。それ以前は学内での開催が多かったと思います。

宇野：それが外へ出るというのは、やはり新学科立ち上げが影響していたのですか？

松崎：羽田さんの場合はそうですね。はっきりと。

高石：僕は本学に赴任してきて直ぐでして、その司会をして欲しいと頼まれました。

小山：確かに、福祉を作って、アジア文化を作って。公開講演会の第 13 回が、ちょうどアジアの出来る前の年（1998 年）の 6 月でしょう。だからこれは広報だったんです。翌年の 4 月に赴任予定の田村先生を講師として開催しています（田村史氏「東南アジアの音楽の源流を探る」）。だから、来年アジア文化学科が出来るぞというシンポジウムなんですよ。

高石：そういう意味では、この第 13・14 回がまさにアジアと福祉の立ち上げですね。その前の第 12 回の「現代の不安と宗教」（1997 年 10 月）、これはまさにオウム真理教の事件があって、宗教をバックボーンにした大学として、非常にタイムリーな企画なんですよ。ここでは小山先生が司会をされていて、内部からのものでした。

小山：これは私が山崎さん（山崎龍明氏）と交渉して、熊日で記者だった丸野さん（丸野真司氏）、この方も私が呼んだんですけれども。この人が、オウムがあの大事件を起こす前の、小さなグループの時に阿蘇に来てるんですよ。最初は阿蘇でコミュニケーションみたいなものを作って、阿蘇の住民から変な奴がいるって問題になって熊日が取材しているんですよ。だからこの人は、あれが大きな団体になる前からずっと密着取材をした人で、それでその話をしてもらおうということ。

宇野：なるほど。

小山：だから事件は大変な事件だったけども、やっぱり、既成の宗教が力を失っている、そういう企画だったんですね。非常にタイムリーな。

高石：並べてみますと非常によくわかりますけれども。

第 7 回、第 9 回も「環境問題」が主題です。これもうちが家政（生活）学科を持っているので、内部の教員たちが関わってということですよ。それから大きな主題である「浄土真宗とはなにか」から始まって、「キリスト教と仏教との対話」があり、そして「現代の不安と宗教」という時事的な課題が考えられたり。そして、第 10 回の「学校教育再考」、第 11 回の「越境する日本語」も、自己点検評価表ではかなり人を集めたと書いてあって、ある意味ではかなりインパクトのある企画だった。これも心理系の人がいったり、松下先生が



こういう問題を扱ったわけでしょう。だから第 12 回までは、内部の人材の研究を反映して、うちが主題設定をしてやった、という意図が明確にあるんですよね。そして、第 13 回、14 回辺りがアジアを立てる、福祉を立てる。ここからかなりそのための広報宣伝に変わっていくようなニュアンスがあります。

小山：第 16 回（1999 年 11 月：杉浦康平氏「宇宙を呑むーアジアの宇宙大巨神の系譜ー」）もまさしくそうだったんですよね。これはアクロス福岡へすごい人が来ました。

高石：それからエルガーラでしょうか。

小山：だんだん会場がデカくなって。

宇野：だんだん外に出て、生涯学習という風に性質が変化しているなってことは、はっきりと招いている人間とハコでわかりますね。

高石：だから第 12 回の小山先生が主導された回まで、うちの研究所らしいよね。

宇野：そうですね。研究所らしい感じがします。

高石：その中に第 3 回の、先ほどの名本先生の話しの国際文化研究所にふさわしい外国語教育における比較研究もあります。第 6 回には日文を中核にしたやつとかね。

宇野：そうですね。日文のやつもありますね。これはやっぱり内部の先生方の研究課題というものを拡大して、広げていこうというような意識でシンポジウムが企画されてきたと考えていいのかなと思います。

高石：だから、後の第 20 回（2001 年 12 月：上野千鶴子氏「家族はどこまで変わったか」）は、木下謙治先生が上野千鶴子氏に交渉してみよう、あの人来てくれんだろうか、いい宣伝になるがという、そういうような形で企画されてますね。

間瀬：私がかかわったのは、第 27 回（2005 年 7 月：浦田義和氏、南富鎮氏、後藤みな子氏「戦後 60 年を問う 文学の視点からーアジア・核・基地ー」）だったんですけども、ハコも大きいエルガーラなんですけど、びっくりするほど沢山の方がいらっしゃってくださったのをよく覚えております。

宇野：一般の人は、エルガーラでやると、かなり来てましたよね。天神の会場を使うと、かなりの方が来てたなあと。私も何度か行きましたので覚えております。

間瀬：もう一つ関わったのが第 28 回の「日中文化交流漫談」（2005 年 11 月：中華人民共和国駐福岡総領事、武亜朋氏）。これは安全上の理由や様々な理由で、学内でしか出来ないという判断で、警備の方を雇ったりとかいろいろなことをしたんですが、結果として何事もなく無事に終わったことをよく覚えております。何か起きるんじゃないかとひやひやして。前日には警備の方が来て会場を見たり、私もそれに付き合ったりもしました。当日、私は外におりましたが、中で話を聞かれた人は、非常に興味深い話であったということで、とても好評だったことを覚えております。この数年間は、ずっと本学の教育主題と深くかわるテーマが続いていると思います。

共同研究と研究助成

宇野：もうひとつ、自己点検の書類を見ておきますと、シンポジウムから発展した形で、共同研究のプロジェクトが少しずつ出てくるんです。とくに平成 7、8 年度（1995、1996

年度) 辺りの自己点検報告書などを見ておきますと。平成 9 年 3 月 31 日に横田先生が書かれた「平成 7 年の活動内容」というものがあります。その最下段に共同研究と書いてありまして、ここには「宗教学研究プロジェクト、研究テーマ：現代における浄土の概念、キリスト教との対話の中で」とあります。研究会を年間都合 6 回やって、科研費まで交付されているようです。その下に「言語プロジェクト」というのがあって、7 月にアンケート調査を実施しているということが書いてあるんですけども。こういう形での共同研究というのはどのように始まったのでしょうか。小山先生は科学研究費補助金のメンバーに入ってもらえるようですが、これはシンポジウムと連動していたんですか？

小山：ええ、そうですよ。だから第 8 回シンポジウム（1995 年 10 月）で John B. Cobb さんなんてキリスト教と仏教との対話のホープというか、売り出し中の人に来てもらって、ハーバードの Gordon D. Kaufman さんもそうですけれども、宗教間ダイアログというのが持ちあがっておりました。そういう人に来てもらって、刺激を受けて、なんかやろうよということで、共同研究が始まりました。デニス広田先生と私と横田先生で科研を申請したんですよ。そしたら科研費が採択されたんです。

宇野：2 年間科研費はおりてるんですよ。

小山：はい。論文書いて報告書を作りました。そういう意味で研究所の一つの研究成果としては形として残ったんです。

宇野：なるほど、ずっと研究所のシンポジウムが、研究の発展と結実の起爆剤みたいなものになっていたんですね。

小山：それはもう、やっぱり横田先生の熱意と言うか。どうしてもやりたいという、そういう感じに乗っかっていきました、私は。

宇野：「言語プロジェクト」というのは、いったい何なんですか？

高石：その前の平成 7 年 3 月 31 日の横田先生が書かれた「国際文化研究所に関する配慮」の項に、平成 7 年度は言語グループが在校生の言語、日本語の調査と分析を行い、宗教グループが、先ほどおっしゃった 10 月にシンポジウムを、と書かれていますね。この日本語調査というのは、先ほど名本先生がおっしゃった『論叢』第 3 号の、これの下地の調査じゃないんですよ。この後ですね。

宇野：これは名本先生が関わられたわけじゃないということですか？

名本：ないない。

高石：日文の言語系がやられていたんでしょう。

宇野：橘先生、これは、日本語・日本文学科が共同研究をやっていたんでしょうか？1993、1994 年の自己点検報告書の「平成 6 年度の行事」に第 6 回シンポジウム開催とありますね。「日本語の現状と将来、地方の言葉から考える」で、ここで橘先生も発表しておられるわけですけども、このグループという訳じゃないですか、アンケート調査とか。

橘：小野先生か中村萬里先生なんかがやっていたと思います。

宇野：このグループが言語プロジェクトというのをやっていたんですかね？

高石：橘先生は発表なさっているんですけども。その司会は小野先生がなさっているんですよ。で、橘先生と中村萬里さんと陣内先生（陣内正敬氏）の三人が発題者になっています。「日本語の現状と将来」という、そのあたりで言語プロジェクトっていうのがあったんじゃないでしょうか？

橋：あったんでしょうかね、私はそのところはタッチしていない。

宇野：ここではちょっとわからない。小野先生に確認した方がいいかもしれない。それで、共同研究がシンポジウムを下敷きにしてスタートしていると思うんですが、これが続かなかったのはなぜか。シンポジウムが外部向けに変化したということもあると思うんですが、結局この当時、研究所が、共同研究のための研究資金を確保できなかったというのが、一番大きな理由なのかなと想像します。小山先生が参加された科学研究費補助金というのは、共同研究を進めるために資金を確保しようというような、そういう意図もあったんじゃないかなと思うんですけれども。

小山：いやこれはね、もう横田先生がえらい熱心にされたんですよ。もらえるかももらえないかわからないけれども、とにかく出すんだ、と言う感じで。一生懸命やらされた覚えがあります。

宇野：それで、横田先生の手書かれた自己点検評価表の最後に「研究活動を活性化するために、教員の個人研究費以外にグループまたは個人の特別研究の為の研究費が必要であると思われる。研究を希望する教員には、できる限り様々な形で研究する機会を与えるべきである」と考えるからである」という一文があります。

高石：いまの記述との絡みで一つお聞きしたいと思うんですが、教員の個人研究費というのはあったんですか？

小山：あったと思います。

高石：共同研究費というのがなかったんですね、個人研究費はあって。その他にグループとか個人の特別研究のための研究費があるよね、という話。さきほど名本先生が、日本における英語教育の問題で調査をやられたようですが、こういう調査の費用というのは、どこから出されたのですか？

名本：その費用はですね、はっきり記憶しませんが、語学助成財団から、われわれお金をもらったんですよ。

宇野：では外部資金ということですね。研究所のお金だということはないですね？

高石：この大学英語教育学会九州・沖縄支部から少し補助が出たという事はないですか？

名本：いや、これは全国の大学英語教育学会からの援助資金。それと、語学助成財団から来てる。

高石：先生、その『論叢』第3号の「福岡県内の大学生の英語力と学習実態に対する総合的研究」、この研究のために学習実態に関する調査か何かをおやりになってる。その調査費用なんかは、大学英語教育学会から出たんですか？

名本：大学英語教育学会からは、その調査に対して助成が出たのか、後の出版に対して出たのか、ちょっと記憶がないんですけれどもね。大学英語教育学会の方からは、先行研究でまだ形がないから、それを論文にしとこうということで。3ヶ国でやるためにはまずこれで、どういうアンケートがいいかということの先行研究をやったわけです。それを日本の福岡県内のいくつかの大学でやっておいて、うん、これならいけるということがわかったから、こっちに進んでいったわけですから。

宇野：でもいずれにしても、研究所からお金の助成があるだとか、大学から共同研究として外の人と合わせて特別助成を出しましょう、というような制度は一切なかったという訳ですね。

高石：今だったら、うちの特別研究助成のような性質のものでしょうかね。

名本：それで思い出しましたが、著書を出した時に本学の出版助成をもらったのは、川辺先生が第一号ではなかったかと思います。

宇野：出版助成を最初に受けたのは誰なのかというのは、よくわからないんですけども、出版助成や特別研究助成の制度が始まったのは、おそらく2000年度（平成12年度）からなんですね。それまでは、名本先生が大学英語教育学会だとか、小山先生が科学研究費補助金等で、外部資金を獲得された形で研究が進められていたんでしょう。学内でも、そういうことが必要だろうと考えて、1997、1998、1999年の3年間（平成9、10、11年）だけ、国際文化研究所に研究助成事業というのが存在しているんですよ。

名本：たしか私のときに、そういう制度を作るべきではないかということをお勧めされた方があって、研究助成をやるべきではないかという動きが始まった。

宇野：これが、名本先生が所長で横田先生が主任の時なんです。

名本：だからぼくはそういう記憶があるんです。助成金のようなね、出す必要がありゃせんかと。そういう議論とか話をした記憶がありますね。まあ僕の時にもらえんやっただからという訳じゃないですけども、そういう記憶がございます。

高石：今の問題は、研究所がずっと要望してきた研究所での研究助成と言う問題が、2000年（平成12年）からは研究所の事業ではなくなっているということ、大学の中に個人研究費と共同研究費というのを設けて、大学の庶務課が管理するような形で、特別研究助成を申請した人に対して配分していくというような制度ね。それが2000年からスタートするんですよ。この時の学長が名本先生だったと思いますが、その経緯がよく分からない。研究所の長年の懸案として、1997年に最初に間瀬先生から始まって、何人かの人が研究助成を貰い始めて、ようやく根付き始めた。それが2～3人採択されて、機能し始めた。ところが、個人研究費管理と同じように共同研究費という名目で、特別研究助成から出版助成も含めて、研究所事業ではなく大学事業にしちゃったのはなぜでしょうか。大学の事業になった経緯について、先生何がしかご記憶は？

名本：まず研究所に作ったんですよ。それがまた私の所長時代に方向変換しとるということが、ちょっと私には、残念ながら。

宇野：じゃあ間瀬先生、もらった側としては。



間瀬：はい。私今日はこのために呼ばれたと思うんですが、その時に、研究主任の横田先生が私の部屋までいらっしやまして、今回こういう制度を作ったので、ぜひ応募してほしいという風に言われたんです。この時は非常に変則的で、8月に応募申請受付が行われまして、この年度だけ、10月から2月までが助成期間。半年弱ですね。それで額はここに内規があるんですけども、額ははっきり覚えておりまして、共同研究が50万円、個人研究が20万円だったんですが、ここに記録がありますように、共同研究申請者無し。個人研究は、2名の名前が書いてあって、20～40万円だったと。たしか翌々年（1999年）も共同研究にも参加しております。実際、何

の成果もなく終わっているんですけども。見ておきますと、この研究助成金というものは、今の特別研究助成金にも連動しております、例えば原則2年以内に成果を著書又は学術論文で発表する。著書というのは非常に厳しいですが、そういうことも規程されています。それから、ここはすごいんですが、研究報告書を提出しない場合、または研究成果を発表しない場合は、支給された補助金の全額を返還する。

宇野：そんな申し合わせがあったんですか。

間瀬：返還規定が、そんな内規だったんですね。今よりも厳しくて、3年しか続かなかったんで、その後どうなったかというのは、何の追及もないまま終わっている。今でも覚えているのは、私、20万円のうち10万円を旅費、10万円を図書と言ったら、ある先生から旅費が多いと怒られたのにも関わらず、そのまま突っ走って、旅費10万円を使ったのですが、その時印を押されたのが松田先生である事を覚えております。

宇野：松田昌子先生ですか。これは先生が、一番最初にもらわれた時ですね。

間瀬：つまり、平成9年（1997年）8月の段階で松田先生が委員であったわけです。

宇野：それは、何の委員ですか。

間瀬：多分、研究所による研究助成の採択を決めるんですから、研究所協議委員であったと、そう思います。10万円旅費はちょっとまずいんじゃない、と言ったのは松田先生でした。ということは、教授クラスが協議委員をやっていたのではないかと。さっきから思っていたのですが、講師とかがやるような委員ではなかったと思います。普通だったら、講師とか当時の助教授とかがやるような仕事じゃなかったと思います。

宇野：研究所協議委員が？

高石：僕もそう思う。だから最初から協議委員がいろいろ企画したはず。学科から、一人ずつ当て職のように出したようなもんじゃなくて、大学の代表、短大の代表ということで。

間瀬：そういう、要するに管理職を経験するような方たちの仕事だったのではないかと。さっきから聞いていて、私が委員をやったような事は一度もありません。

宇野：僕、委員やったことあるんですが・・・しかも新任の講師の時です。1年目で2000年度（平成12年度）に研究所協議委員やっています。

間瀬：初期の頃は、すごい気合いが入っていたと思います。真剣に議論をして、学校のテーマ、学校を代表するようなテーマ、それから大学・短大の先生が協力し合ってやった、という。

宇野：わかりました。私が就任した頃には、研究所はかなり緩くなってしまった時代だったのかもしれないね。

間瀬：そうだと思います。

宇野：僕が就任したころは、学長である名本先生が所長でした。研究所協議委員会は、野口先生が研究主任として主導してやってらっしゃいましたね。

間瀬：さっき、横田先生がなぜ私のところにいらっしゃったかということ、研究助成の応募者が全く無いんじゃないかということ、それを心配されて、それで声を掛けてくださった。今じゃ考えられないことですよ。それからやっぱり『論叢』に成果を発表すべきだというのが、私にはありました。『紀要』じゃなくて。

宇野：なるほど。それはやっぱりシンポジウムにしても何にしても、研究所の研究は『論叢』にアウトプットしていこうという意識が教員にあったんでしょうね。

間瀬：教員にありました。

高石：1997、1998年度自己点検評価表という資料がありますね。1998年（平成10年）の自己点検ですけれども、その「国際文化研究所の活動」というところに、1997年には「個人研究2名への研究助成を実施した」と記載されています。これが間瀬先生を含む研究助成の始まりなんですけれども、そのあとの方の、1998年のことだと思うんですけれども、「最後に前任者から引き継いだ検討事項、（1）研究補助金と（2）出版助成金に関する内規作成の件は、1998年（平成10年）に検討し審議した結果、教授会で承認され成立した」と書かれています。だからこれが、間瀬先生がさきほど言われた内規じゃないかと。

間瀬：そうですね。今日ここに持って来ているのは、その内規の案です。

高石：じゃあ内規の件は、1998年に検討し、教授会で承認・成立したと。ところが、この自己点検には、研究助成を初めて実施して、1998年（平成10年）の時点で研究所の研究助成をやり始めたその段階で、「しかしながら、これも2000年（平成12年）から、他の分掌に移行されるとのことである」と書かれています。ということは、研究所で研究助成したけれども、これは2000年には大学の方に移行される予定、と最初から想定されてるんですよ、これ。だからそこまでのつなぎでとりあえず研究所で助成しようということでしょう。

宇野：そうですね、本当に。

高石：これは研究所が研究所としての事務執行体制を持っていない。補助的な事務職員はいたけれども、課長もいるような事務執行体制を持っていないから財布を扱えない、事務執行できないということでしょうか。例えば、龍谷大学の仏教文化研究所などは、研究所が事務体制をもっている。本学では残念ながらそこまでの体制を作れないものだから、大学本体で、庶務課の中で研究助成を扱わざるを得ないという、そういう判断だったんじゃないか、と私は思っているんですけれども。名本先生そのところは？

名本：おそらく、そういう判断じゃないでしょうかね。

高石：研究所に研究助成事務を置いても、そこで財布を預かる事務体制を持ってないし、執行してゆく事務体制を持っていない。そこが僕は一番大きかったんじゃないかと。結局大学の庶務会計を財布にせざるを得なかったんだらうと思うんですよね。

間瀬：金額的な問題なんですけれども、大学に研究助成事業が拡大した時に、規模が非常に拡大して額が全然違います。個人研究が、20万円だった訳ですから、それが大学本体に移ってからは、個人研究でも4～50万と非常に拡大しています。大きな変化があります。

高石：そこは名本先生、何か覚えておられませんか？

名本：ああ、申し訳ありません。

高石：多分、これは、僕は林幹男先生から聞いたような気がしますが、新学科（アジア文化学科、人間福祉学科）を作る時に、文科省からも指導があったんじゃないかということです。本学の研究支援に個人研究はあるけど共同研究費がないね、という指導ですね。だから、新学科の立ち上げは1999年以降になるでしょうけれども、その前に申請の相談に行っていたわけです。内側からも研究助成、共同研究費が欲しいよねという願いがあったんですけれども、外圧もあって、文科省から共同研究費がないね、ということ言われたんでしょう。だから、おそらくそういう指導の中で一つ一つの研究がどうかよりも、国との関係の中で、まずは総枠設定の必要があって、その中から恐らく共同研究の枠を取らざ

るを得んから、それをどんな風に配分していくかという問題でしょう。一つの共同研究に150万円付けるとというのが先にあったのか、総枠を取ってその細分化をという形で結果的に今の金額になったのか、そこのところが、もう一つわからない。名本先生、福祉とアジアを立ちあげるときに、文科省との折衝の中で、共同研究費の問題とか、共同研究費を確保しなければならないという、そういう話しはあったのですか？

名本：そういう話はちょっと出とった。

高石：教育研究費の中で、研究に対してどれだけの予算のパーセンテージを取っているかということは、そのへんはどうでしたか？共同研究の話はかなりありましたよね。

名本：はい、文部省と。当時何度か行きましたからね。

宇野：で、その時に共同研究費を確保しなさいというような形で？

名本：はい。

小山：それは私にも記憶があります。林先生が学部長でいられた頃でしたかね。

高石：林さんが設置準備室長か何かをされていて、事前に折衝をされていたんですよね。

小山：林先生からね、本学は共同研究費が少ないと言われた、と聞いた事がある。

宇野：この時点で、共同研究のための研究資金が欲しいという風に横田先生が思い続けて、それで共同研究が出来るようにしようという話になったところで、新学科開設で、文部省からの指導があって、すぐに規模の拡大が必要になった。しかし、研究所には事務組織がないので、大学本体の方に研究助成事業は移行しようと、そういう流れですね。

名本：でしようね。

高石：自己点検評価表のなかに、平成10年（1998年）の段階で、「他の分掌に移行されることである」とあうわけでしょう。平成10年というのは、文科省と2学科を増やすための事前交渉を行ってた頃なんですよ。だから多分、間瀬先生、個人研究が20万円だったというのは、大学にお金がなかったからじゃないと思う。共同研究にもっと割けよ、と言われた結果でしょう。ある意味じゃ内側からも要望があり、外からもプッシュがあって、共同研究費の出し方が変わった。懐の問題じゃなかった気がする。総枠設定から小分けを考えたのか、小分けを20万円から150万円に一気に増やそうという発想だったのか、そこはわからんところですけどね。

宇野：なるほど。本当にこの3年間限定で、研究所が研究助成を出したわけですね。

名本：そして急に方向転換したのは、今高石さんが言ったようなことでしょう。私も文部省に、それで何度も行っとるんですけどね。そういう指導だったと思います。

高石：ただ、これが言われてからというのではなく、内側からの必然性でもあったんですよね。研究所で何度も共同研究をやろうという方向はあった。金がないもんだから、科研だとか学会の外部資金をもらってという感じでやっておられたわけで。そこによく外からの後押しを受けて、こういう形になったと。研究所の中に助成事業を組み込めなかったというのは、僕はむしろ事務体制の問題が大きいと思う。財布を出し入れする事務執行体制を設けられなかったということでしょう。

研究所の組織

宇野：実は予定時間を過ぎてしまいました。やっと2000年（平成12年）位が終わったと

ころで、前の 10 年だけで 2 時間経ってしまいました。それ以降、学長が所長を兼任するというのは 2001 年からなくなりまして、木下謙治先生が所長になりました。今日は用事があるということで出席されておりませんが、木下先生が所長、松下先生が主任と言う形で、2001（平成 13）、2002（平成 14）年度です。2003（平成 15）年度は橘先生が所長になられて、松下先生が研究主任継続ということですよ。

高石：その組織の事についてお聞きしておきたいことがあるんですが、名本先生が平成 9 年から 14 年までの 6 年間学長をおやりになった。それでこれは当初から学長・所長兼務ということできていたから、平成 9 年度から 12 年度までは先生が所長を兼務しておられましたよね。それが平成 13、14 年度に関して、学長の所長兼務をやめられて、所長を別に立てられて木下先生が所長をされています。そこには何か意図があったんですか？

名本：それは私が辞めた後ですからね。

高石：いえいえ、まだ名本先生が学長の時です。その前が三隅先生で平成 5～8 年となつてまして、9 年度から名本先生となつてますから。結局先生が学長をやられた 6 年間、平成 14 年度まで学長をされた訳です。しかし、学長・所長兼務というのは平成 12 年度までで、ちょうど学長再任後の平成 13、14 年度は所長を別に立てておられる。木下先生に所長を譲られているんですよ。この理由は？

名本：その理由は何やったかな。

宇野：私は 2000 年（平成 12 年度）に研究所協議委員でしたが、その年最後の協議委員会で、名本先生が「所長は別の人に譲るから」とおっしゃったことを覚えています。

名本：ああそう。どう言ったかは記憶しないけど、兼務じゃない方がいい、という考えは持ってたんです。

宇野：そのとき名本先生が、「学長だと協議委員会にもなかなか出て来れないし、研究所の所長は学長兼務じゃなくて、別の人がそれ専属でやった方がいい。」というようなことを、おっしゃったことを記憶しています。

高石：それは研究所にとって、所長が学長の当て職じゃなくて、研究所の所長として独自に役割を持つべきだという、その発想は研究所にとって非常に大きいんですよ。

名本：それは僕も矛盾を多少感じていましたからね。

宇野：その当時、合同教授会の後に全教員がいる中で研究所の総会が行われて、それで研究所の研究員というのは全員なんだ、という形でしたね。学長が所長ですから。でも学長ですから協議委員会には、殆ど出席することができない感じでした。それで野口先生が、研究主任が協議委員会をリードしましたね。

名本：やっぱり僕はね、専任の所長がいた方がいいんじゃないか、という印象をずっと持ってたんですよ。

高石：それは先生、大きい事ですよ。

名本：それで学長が兼任するような、あいまいな仕事の仕方じゃないかという考えはずっと持っておったから、恐らくその時に言ったんだろうと思いますね。

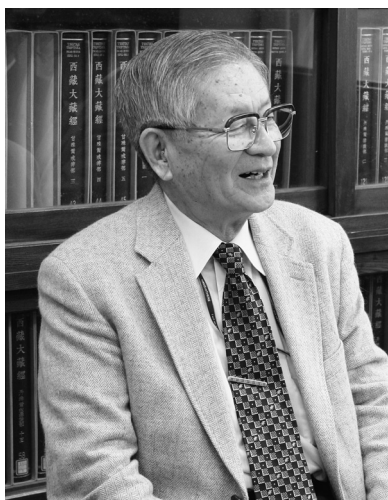
宇野：先生は、なかなか協議委員会に出られないということも、気にされてました。

高石：なるほどね。

宇野：それで、先生が木下先生に頼まれたのですか？ 推薦ですかね、どこかからの。どのように木下先生になったのかがわからない。

名本：木下先生から、実を言うと、その時非常に大きな研究計画を聞かされておったんですよ。

高石：研究所としての構想を？



名本：そうそう、研究所としての構想を。すごく大がかりな。だからね、だんだん思い出してきたけどね。それを実現してもらうためには、この人を所長にした方がいいなと、そういう。それがすごく大きな研究計画で。僕はあの後、木下先生に言いたかった。あなた、あの計画はどうなったんかって、言わんまま辞めたけどね。その時かなり大きな研究計画を聞かされてね。名本先生、こういうことをやったらどうかなあってね。それを聞かされとったから、恐らく僕はそういう発想になって言ったんだと思う。

高石：だから、その時の研究主任の松下先生が、実質的なイニシアティブをとったのでしょう。所長が、学長の兼務で当て職みたいなのだったので、実質、研究所は主任

が運営をするよ、と。この感覚というのは僕も聞かされてました。

間瀬：それは本当にそう思っていました。初代主任の横田先生が初期の段階で中心になって、学内を動き回っておられてましたから。

宇野：橘先生は、どんな経緯で所長になられたんですか？学長からですか？

橘：いや、研究主任の松下先生から。私が推薦するから、あなたは何もしなくていいと言われて。

高石：だから、そこはこれまでの流れでしょう。学長・所長兼務制のこれまでの感覚をずっと引きずっている。でも恐らく名本先生の時は、木下先生とそんなやりとりがあって、やはり本来兼務すべきではないと。協議委員会にも出られないのだから、木下先生が構想を持っておられたのだから、じゃああなたやってよという形だったんですよ。

名本：僕の腹の中ではね。この人の研究計画構想はすごいものがあると思ったので、それをやってもらうとこの学校のためになるな、と思って。

高石：それがなぜ実現しなかったか、いずれにしろ木下先生を引っ張り出して、尋ねてみるしかないですね。

宇野：聞かないといけませんね。なぜ先生の研究計画を、研究所でやっていただけなかったのですか、と。

高石：どういう計画だったのでしょうか？

大津：どういう計画だったか、というのも興味ありますよね。

名本：木下さんは忘れとるんじゃないか、そういう話を僕にしたことを。

高石：ここは大きなターニングポイントだったと思うんですよ。

宇野：で、橘先生の時代に行くんですけども。この時も先生、研究主任の松下先生が僕が全部やるから、みたいな感じだったのですか？

橘：ええ、私がしますからという感じで。私はリーダーシップは全く取っていません。

高石：先生の研究所構想は？

橘：もちろん意見はしますけど、最後は承認するだけでした。

宇野：そのころ先生、研究所協議委員というのは各学科から？

橘：それぞれ出ておられました。

宇野：出てましたよね。

橘：出てました。外国人の方が多かったです。誰だったかな、2人ほど。

宇野：21世紀に入ってからの協議委員は、もうほとんど会議が無いから、というような感じで、楽な委員会として扱われている感じでした。日本語・日本文学科では、気楽な委員会だから新人の私になった、というような。

小山：結局は、共同研究助成の所管が移っちゃったから、権威ある協議委員会ではなくなって、研究所の単なる委員みたいになって。

橘：仕事がなかった。

小山：仕事がない。研究主任がバリバリやってるし。

宇野：やっぱり共同研究の特別研究助成が大学に移管されて、研究所が共同研究の場と言うよりも、『論叢』をどこの業者に決めて、締め切り何日というような、また公開講演会どうするか、研究談話会どうするか、ということ以外は何もしない。

高石：やっぱり事務体制の問題はあるけれども、共同研究費ですね。研究所から研究助成の願いが芽生え、膨らんできた。研究所に資金を置いて、競争でそれを取りに行くという体制が出来れば、研究所が研究所になってゆくはずでしょう。

人間文化研究所への改組

高石：それから、さらに後の話でしょうけれど、「人間文化研究所」としたのは、福祉・心理が立ち上がり、教学分野が広がってきたものですから、「国際文化研究所」を「人間文化研究所」というふうに、「国際」を「人間」にした、マイナーチェンジなんですね。あの時、「人間科学研究所」にはしなかったなあと今思うんです。大学院が「人間科学研究科」、今度新しく立ち上げようとしているのが「人間科学部」ですよね。で、大学院設置時の「人間科学」というのは学際的なコンセプトなんです。大学全体を包むから、学際的なコンセプトとして「人間科学」という概念を使った。そういう意味では、この研究所を「人間科学研究所」にしてもおかしくなかったんですけれども、「国際文化」というこれまでの伝統はなるべく置いておいて、しかしもう少し広げたいというんで、



「国際」を「人間」にし、そして「人間文化研究所」にした。そうして、『論叢』がまずかったという訳ではありませんが、『論叢』が実質第二紀要化しているという感じがありましたので、なるべく共同研究ベースのものにと考えました。こうして振り返ってみますと、むしろ、研究所の元々の生い立ちの所で志向されていたそこに帰りたい、というところに

結果的になるんですね。そのための仕掛けとして、これも元々規程があった客員研究員制度を実質化しました。内部だけで共同研究をやるというのは非常に人材に限られていますから、外部の研究者と一緒にやってうちがイニシアティブをとって共同研究ができるように、客員研究員制度を生かそうということです。それと、外部の人を連れて来ているということ、実はもう既にやられていたんだなということを変更して思いますけれども、うちの先生たちが外部の研究者でいま面白い事をしているなという人を引っ張って来て、うちの先生たちと何人かで研究会をやろうという形。これに助成しようという、今の特別研究会の仕掛けも、実は考えてみたら、この研究所が願われていた元に戻るような仕掛けを僕は作ったのかな、という感じがするんですね。ある意味では、外の人も含めてだけでも、基本的にはうちの先生たちがイニシアティブをとって、シンポジウムのための勉強会をやって、シンポジウムをやって、『論叢』に載せてゆくという、こういう流れです。しかし、アジアと福祉の立ち上げのときに、シンポジウムとか公開講演会がかなり生涯学習的な、外に宣伝を兼ねるということになりましたから。それで生涯学習という別のランチを作って、研究所をもう一回元に戻そうと意図しました。そういう意味では、仏教学研究室も研究所内で研究機能を一元化していこうということです。研究所の研究機能の中核にうちの特徴である常設研究プロジェクトとして、仏教学研究室を位置づけようと考えました。研究機能の一元化ということ、それと外向けの宣伝ではなく内在的な共同研究をベースにしていって、『紀要』との差異化を図るといような、構想です。こんな風な人間文化研究所の生まれ変わりを狙ったんですね。しかし、これは振り返ってみますと、研究所の最初の方向に立ち戻ろうという感じがしますね。

宇野：そういう感じがしますね。平成 18（2006）年から「人間文化研究所」に変わったんですね。前の松下先生だとか間瀬先生が主任をやられたころから、研究所というのはいったい何なんだろうというような話はあったと思うんですね。もっとまともな研究組織にしようということだとか。そういう風な感覚はあったんじゃないでしょうか。

間瀬：覚えておりますのは、第 21 回談話会です。3 人の発表者なんですね。今日お見えになっていなくて非常に残念なのですが、川邊先生が、談話会への先生方の出席が少ないことを気にされていました。2005 年 12 月 8 日の談話会なんですけど、非常に短時間で一人 20 分、3 人にしようと。そしたら出席が増えたかと言うとそうではなかったんですが、結局その試みは 1 回だけで終わってしまっております。ただ時間は短かったんですけども、非常に強烈な印象がありました。今いらっしゃる現所長の大津先生にもお願いしたんですけども。私にとっては思い出です。当時、私はどういう関わりをしたかという、2005 年度は研究主任で、2006 年度からは人間文化研究所の運営委員を高石先生の下でしまして、大きな変化、つまり公開講演会を生涯学習に移管しました。公開講演会の最後というのを経験しておりますし、公開講演会がなくなったあとの研究所の『論叢』（現在の『年報』）を発行し、談話会をし、そして特別研究会をしてみたりとか、客員研究員ができてみたりという大きな変化というので。今また外向けではなくて、内なる力をどうしようというような、そういう経験をしました。そういう動き、方向性もいいと思います。

宇野：一度に 3 人で研究談話会をやったのは間瀬先生の時が初めてだったんですね。

間瀬：これだけです。いろいろな候補者がいたんですけども。研究所の名前が変わりまして、研究所が大きく変化する中でだったんですけども。

宇野：やはり昔みたいに、研究談話会に先生たちがもっと来てほしいと、先生方が主任や所長でいらしたときに模索していらした。

間瀬：そうですね。過去にたくさんの方が出席したことを知っている人間であればあるほど、なんか、5～6人とかじゃね。

宇野：今は、研究所が勝手にやってるよ、みたいな感じに受け取られています。

間瀬：そんな感じじゃなくて、もっと充実したいなという思いがあって。

高石：名本先生、研究所の総会というのは、4月の合同教授会の定例行事だったでしょう。あれを僕は止めたんですよ。大学・短大の先生イコール研究所の研究者じゃなくて、大・短の先生で、研究テーマをもって研究所の研究者に名乗り出るという形に。つまり、こういう研究テーマで今年の研究所の活動に私は参加します、とそういうふうには先生方には、もっと主体的な関わりを持ってもらおうと。そうすることによって談話会も共同研究も活性化するだろう、もう少し意識化しよう。だから、本学の教員であれば、その意思はともかくすべて研究所の研究者とはしなしたんです。これに資金を付けられれば、自分は今年こういうテーマで研究所の特別研究に、共同研究に申し込むという風に、もっと明確に動機づけられるんですけどもね。今のところ資金助成はないけれども、まずはテーマを掲げて研究者に手を挙げようやと言う形にしたんですよ。それで平成18年から、研究所を活性化するために、まずは大学・短大の先生だからそのまま研究者とするのはやめよう。研究所の活動になんにも関わらなくても研究者というのは違うだろうと。本当は研究者として登録していないと研究所の『年報』には書かせませんよと、そこまで一気に持って行きたかったんですけどもね。そろそろこれは考えてもいいような気がします。

宇野：そうそう、我々が考えなければ。

高石：過渡期という事でやってきたところは多分にあります。本当は、研究者として手を挙げてもらって、特別研究助成申請を研究所で受けて、研究所の協議委員がレフリー役をきちっとやって、という流れがいいでしょう。私も、前の龍谷大学の仏文研（仏教文化研究所）の『紀要』というのは全部共同研究でした。そういう意味では、研究所の『紀要』と大学の『紀要』とは全く性質が違います。うちは教員数が少ないから、内部の人間だけでは共同研究は難しい。だから客員研究者制を生かして外部の人と一緒にやる、という仕掛けだったんです。そういう風にしたのは、資金も人材の数も少ない中で、一生懸命何かしようとしていた研究所の草創期の精神に帰ろうということだったかなあ、という感じがします。

橘：例えば定年で辞めた人達で、もう少し研究したいという人がいた場合に、こういう人達を外部研究者のような形で、研究所で何かできるという、こういうシステムを取ると少し幅広いことがやれるかなあ、と思います。

高石：今のところ、客員研究者という、眠っていたものを引っ張り出して、年間5人、上限10万円で助成して



ます。例えば関西の人で客員研究員になってもらって、何回もは出せないけれども一回福岡に来てもらって一泊して、一緒に研究するというくらいはバックアップしますよ、という形です。10万円上限で5名まで、という仕掛けです。

橘：そういうシステムがあればね。

高石：はい。そういう意味じゃうちの先生でも、むしろ引退後近くにおられて、一緒に研究やろうということであれば、客員研究員という位置づけをしたっていいんですよね。そんなことをあれこれ考えていたものですから、平成18年から小山先生が学長になられて、「あんたが考えとる研究所の形を作んなさい」と言われて、3年間やらされて。そんな事を少し。

橘：65才でもまだね、もう少しやりたいと言う人がいるでしょうから。

宇野：本来ならば、特別研究助成費が研究所にあって、それで研究所で共同研究をしてくださいという風に、それが出来ればいいんですけども。

高石：共同研究費は本当、そうできたらいいね。

宇野：研究所が、皆で研究に向かっていく組織になれるのかなあ、という気がする。

小山：そうなると、さっきから言っているように、やっぱりそこに戻るんだよ。事務体制の組織作りから始めないと。そういう方向で行くべきでしょうね。

高石：研究所に事務を一人常駐させようかと思ったけども、やはり課長がいないと一人孤立して、先生たちに囲まれるとこれは別の意味で駄目だと思いました。やっぱり一人では駄目なんで課長がおって、つまり責任者がいて、実動員がおるという体制は最低つくってやらねばと。こういう草創期のことを考えるとね、最初から場所があったわけじゃない、でも何とか確保が出来た。そして、永井さんは研究所の要員として、囑託か何かという身分で来ておられたんですよね。辞めたのは、他の仕事もやるようにと言われて、研究所の業務ということで来ているからと断ったという話を聞いております。そんなあたりをもうちょっと工夫して、今の事務体制でもいけるような工夫がね。研究所が共同研究費というのを持って、そこに我々が助成を取りに行くという体制にすると、本当は一番いいんでしょうがね。

宇野：これからの研究所というのがどういう方向性を目指していったらいいかということを考えてみますと、今日私が一番うれしかったのは、ただ初期に戻ればいいだけなんだということです。この初期の精神に立ち返ればいいんだという、大学が出来て、先生方が研究するぞという雰囲気があって、先生方がみんな集まって、よし研究するぞと燃えていたあのパッションに戻ればいいんだって言うことを確認できたということが嬉しいです。

高石：しかもその初期は、金もなければ場もないという。

宇野：本当に、創設期のころの先生方の意識やお考えというところを、今日は聞けてうれしかったなあと、私個人的にもうれしかったなあと思っております。また今後も研究所がどうなっていくかということは、所長と私がもっと頑張らなきゃなあと思いますし、先生方が昔、研究所にいろんな大きな目的を持って研究をされていたなということを確認して、それに立ち返ろうという風に決意出来たという事が今回本当にうれしかったことです。本当に今日は、時間を大幅にオーバーしてしまいましたが、ありがとうございました。

全員：ありがとうございました。



(平成 22 年 4 月 8 日 (木) 於 1110 応接室および人間文化研究所)

人間文化研究所(旧称 国際文化研究所)歴代所長および主任

		名称	所長	研究主任	事務	備考		
平成 2 年度	1990	国際文化研究所	雲藤義道	横田俊二	永井磨理子 (平成 5 年 10 月より)	所長は学長による兼務		
平成 3 年度	1991							
平成 4 年度	1992							
平成 5 年度	1993		三隅二不二					
平成 6 年度	1994							
平成 7 年度	1995							
平成 8 年度	1996							
平成 9 年度	1997		名本幹雄				松崎治之	
平成 10 年度	1998						野口英子	川崎裕子
平成 11 年度	1999						木下謙治	松下博文
平成 12 年度	2000		橘英哲				大賀由加里	
平成 13 年度	2001	櫻井美栄						
平成 14 年度	2002	川邊武芳	間瀬玲子	高田晶子	仏教学研究室を研究所所属研究機関として編入			
平成 15 年度	2003	高石史人	宇野智行					
平成 16 年度	2004							
平成 17 年度	2005	大津忠彦						
平成 18 年度	2006							
平成 19 年度	2007							
平成 20 年度	2008	人間文化研究所	高石史人	宇野智行	高田晶子			
平成 21 年度	2009							
平成 22 年度	2010							